



女も男も輝く新時代 男女共同参画社会

21世紀になって10年が経ちました。男女共同参画社会基本法では、「21世紀の我が国社会を決定する最重要課題」として、男女共同参画社会の実現を位置付けています。

今回の特集では、なぜ男女共同参画が必要とされているのか、そして、男女共同参画社会を実現するにはどうしたらよいか、その方法について考えます。

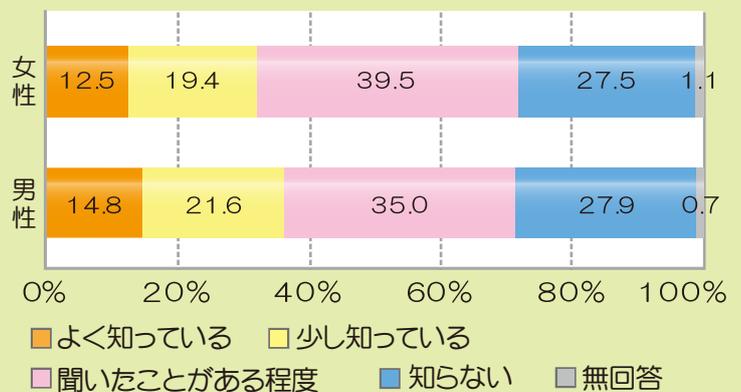
男女共同参画社会とは

「男女共同参画社会」を簡単に言えば、「性別にかかわらず、多様な活動が選択できる社会」ということです。これは、男女共同参画に関する講演会などで活躍する、静岡県立掛川西高等学校の奥山和弘副校長の言葉です。

本市では、鈴鹿市男女共同参画推進条例で、「男女共同参画」を「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うことをいう」と定義しています。

◆ 市民アンケート ◆

「男女共同参画」という言葉を知ってますか？



(平成21年に、20歳以上の市民3,000人を対象に実施)

※このアンケートの結果から、「男女共同参画」という言葉を聞いたことはあるが、内容までは理解している人が少ないことが分かります。

男女共同参画の必要性～人権の視点～

男女共同参画は、人権の視点からも社会経済情勢の視点からも必要になります。ここでは、人権の視点から、なぜ男女共同参画が必要なのかを考えます。

●夢にチャレンジできる社会を！

だれにも夢があります。しかし、その夢に、「男性だから、女性だから」という性別による理由でチャレンジできないとしたら、それは本人にとっても社会にとっても大きな損失です。

性別に関係なく、一人の人間として夢にチャレンジできる社会を実現することが必要とされています。



●男の仕事？女の仕事？

皆さんは、男性がした方がよい仕事、女性がした方がよい仕事があると思いますか。

例えば、重い物を持ち上げる仕事。男性の方が女性よりも力持ちですが、それは男性の腕力の平均と女性の腕力の平均の話です。実際には、男性の中にも力が弱い人がいて、女性の中にも力が強い人がいます。したがって、力仕事は男性に向いているのではなく、力持ちの人に向いていると言った方が正しいのではないのでしょうか。

性別による理由で役割を押しつけるのではなく、一人の人間として個性と能力を発揮できる社会を実現することが必要です。

◆市民アンケート◆

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方をどう思いますか？



(平成21年に、20歳以上の市民3,000人を対象に実施)

※このアンケートの結果から、男性のほうが、固定的性別役割分担意識が強いことが分かります。

性別ではなく、やる気次第！

男性料理グループ「忍ゼミ」 代表 見取 篤さん

わたしたちは、昨年、男女共同参画センター「ジェフリーすずか」で開催された「今から始める男性のための料理講座」を受講し、さらに料理の勉強を継続するために結成したグループです。

これまで、家庭で料理をするのは女性の役割とされがちでした。しかし、やる気があれば、わたしたち男性にも上手に料理ができます。

また、わたしは料理がとても楽しいと思います。こんな楽しいことを「自分は男だから」という理由だけでやらないのはもったいないです。この楽しさを多くの男性に気付いてもらいたいと思います。

料理に興味があるけど、まだあまり料理をしたことがないという男性の皆さん、料理は、料理番組を見れば家でも気軽に始められます。あなたも始めてみませんか。上手にできるようになるかどうかは、性別ではなく、やる気次第です。

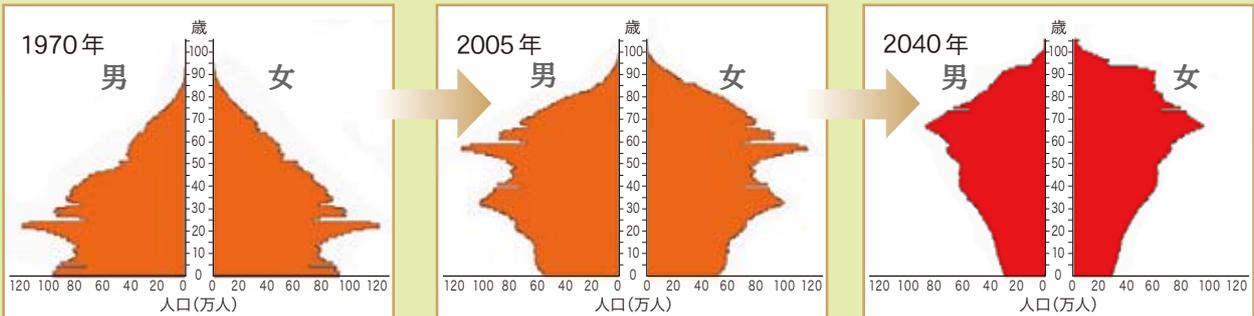


男女共同参画の必要性 ～社会経済情勢の視点～

ここでは、社会経済情勢の変化に対応する視点から、なぜ男女共同参画が必要なのかを考えます。

●急速に進む少子高齢化

○人口構造の変化



(国立社会保障・人口問題研究所ホームページより)

※このグラフは1970年、2005年、2040年の日本の人口を、性別・年齢別にして表わしたものです。このグラフを見ると、少子高齢化の進み具合がよく分かります。

少子高齢化の原因は、女性が一生の間に産む子どもの平均数が減り、一方で、平均寿命が延びてお年寄りが増える高齢化が急速に進んでいるためです。平均寿命が延びていることは喜ばしいことであり、今後も延びることが期待されますが、少子化については、仕事と子育てが両立できるようにするなど、少子化対策が求められています。

わたしたちの社会は、すでに今までとは異なる新しい社会に急速に変わりつつあります。少子化対策と平行して、人口増加を見込んでいた、これまでの社会の仕組みを変化させていく必要があります。

○高齢者を支える現役世代の人数



(国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集(2010)」より算出)

※この数字は、20歳から64歳までの人口を、65歳以上の人口で割ったものです。30年後には、1人の高齢者を1.4人で支えることになると予想されています。

少子高齢化で、とくに深刻なのは、年金、医療、介護など社会保障制度への影響です。社会保障制度は、高齢者世代を若い世代が支えるという「世代間の助け合い」で成り立っています。

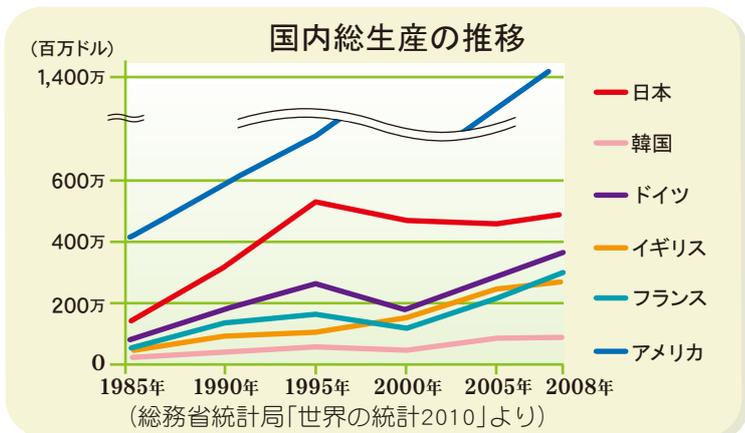
1人の高齢者を1.4人で支えるというのは、男女で支える場合の数字です。男性だけで支えようとするれば、その人数は半分の0.7人ということになり、さらに厳しくなります。つまり、少子高齢社会を乗り切るためには、社会で働きたいと思う女性がどんどん社会進出できるようにすることが必要不可欠です。

●女性の労働力

○国内総生産推移の比較

近年、日本の国内総生産は高いものの、成長率は停滞ぎみです。

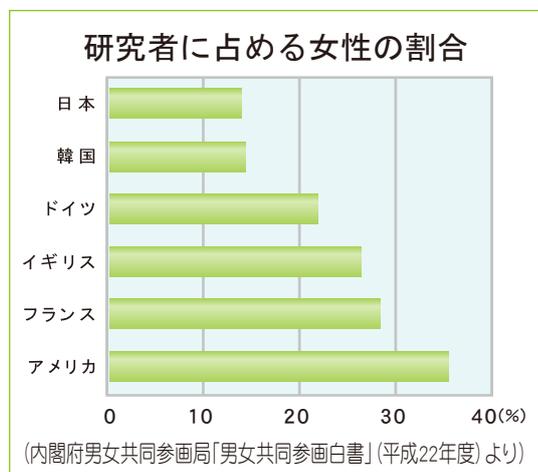
現在、日本の生産活動の中心は男性です。今後、働きたいと考える女性が、男性と対等に、その個性と能力を十分に発揮できる社会になれば、日本の国内総生産が、今より上向きになることが期待できます。



○研究者に占める女性の割合

その一例として、研究者に占める女性の割合をみると、日本の研究者に占める女性の割合は、ほかの先進国よりも少ない状況です。

日本は、男女ともに高校進学率が96%を超えるなど、教育水準が高いにもかかわらず、女性の能力が十分に活かされていません。今後、女性も研究分野で活躍できるようになれば、日本の科学技術力はさらに上昇し、日本の経済力にとって大きなプラスになります。これは研究分野に限ったことではなく、さまざまな分野においても言えることです。



女性の活躍が社会を救う!

男女共同参画センター登録グループ「エンパ会」

エンパ会は、2001年に市主催のエンパワーメント講座を受講し、広報紙の作成や市民講座の企画運営などにかかわり、その後、有志が集まったグループです。男女共同参画センターを拠点にスキルアップや仲間作りのために、コミュニケーション講座やプレゼンテーション講座などを開催しています。今年度は受講生が講師を務める講師体験企画を実施予定です。

参加した女性たちから感じたことは、彼女たちの探究心とアクティブな姿勢です。そんな彼女たち、おのこの思いや能力がいろいろな形で表現でき、十分に生かせる社会になれば、社会全体にとっても大きなプラスになるはずです。女性も男性も、もともと持っている「自分の力」に気づき、その力を発揮し、無理をせず社会にかかわっていけるようになればと思います。

働いている人、子育て中の人、地域で活動している人など、普段生活しているだけでは知り合うことのない人たちと出会い、そこで生まれたネットワークは、新しい自分を発見したり、もう一歩前へ踏み出すきっかけのひとつになると思います。



ワーク・ライフ・バランスをめざして

ここでは、男女共同参画を推進するための取り組みの一つ、ワーク・ライフ・バランスについて紹介します。

●定義

ワーク・ライフ・バランスとは、「仕事と私生活のバランスをうまく保ち、一人ひとりが望む生き方ができる社会を実現すること」です。

ワーク・ライフ・バランス憲章で、「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」と定義されています。



●市の取り組み

市役所では、多くの女性職員が出産・育児休業取得後も仕事を続けています。また、毎週ノー残業デーを実施し、男女ともに家事や子育てがしやすい環境を作っています。

また、男女共同参画課では、男性向けの料理講座を開いたり、男性に子育て参加を勧める講演会を開いています。

職場で実行!ワーク・ライフ・バランス

ワーク・ライフ・バランスの近道は、職場環境を職場のみんなで助け合って改善することです。

- 👉 年次有給休暇を取得しやすい職場作り
- 👉 性別にかかわらず育児や介護に関する休暇を取れる職場作り
- 👉 残業せず、定時に帰りやすい職場作り

第1子出生1年半後の就業パターン



(厚生労働省「出生前後の就業変化に関する統計」(平成15年)より)

※常勤で働いていた女性の半数以上が第1子出産後、退職しています。本当は続けて働きたいにもかかわらず、家事や育児のために退職しているとなれば、改善が必要です。その改善策がワーク・ライフ・バランスです。

ワーク・ライフ・バランスで男女とも輝く

夫も妻も長時間労働では、なかなか家事・子育て・介護などができません。その結果、どうしても妻は、その希望にかかわらず家事や育児などを中心とした生活を選ばざるを得ない状況となってしまいます。日本は、夫の家事や育児時間が短く、夫はほとんど育児休業を取っていないのが現状です。夫が家事や育児にかかわれない分、妻が担わざるを得ません。

そこで必要になるのが、ワーク・ライフ・バランスです。男性も女性もワーク・ライフ・バランスを実現することで、社会で活躍することを願う女性の希望をかなえられる社会になります。このことは、男女共同参画社会の実現にとって、とても大切なことだと言えます。

6歳未満児のいる夫婦の夫の家事、育児時間(1日あたり)



男性の育児休業取得率



広報すずか「男女共同参画社会」についてのご意見・ご感想は、生活安全部男女共同参画課へ

☎ 381-3113 📠 381-3119 📧 danjokyodosankaku@city.suzuka.lg.jp